められしは著者の功績と言はればならないであらう。（共立社書店發行、現代史學大系第十四卷）〔井上〕

●Homenaje a Vicuña Mackenna
(Anales de la Universidad de Chile 1931, 1932)

本書は最近のチリの歴史を「新しい方向へ向けなかつたにしても、少くもその進展に拍車をかけた偉大なる人格」とせられるベンハミン・ビクニヤ・マケンナ Benjamin Vicuña Mackenna (1831—1886) の誕生百年祭（一九三一年八月二十五日）に際して、特に社會的の關係が深かつたサンチアゴ所在のチリ大學が彼に捧げた奉讃 Homenaje の書であつて、上下二卷からなり、主として彼の傳記を收めた外その著作等の資料目錄なども收められてゐる。何れも四六倍版合せて千頁を越える大册であつて、最近時野谷博士の許へ大學から寄贈して來たものである。

ビクニヤ・マケンナはその名によつても想像出來るとほり元來ケルトの出であり、純粹のチリ人でもなければスペイン人でもない。祖父フアン・ビクニヤ・マケンナ Juan Vicuña Mackenna はアイルランドの人であつて、英吉利の支配を嫌つてスペインにわたり、そこで人となつて、或事情（これは傳記にも曖昧にしてあるが大體想像出來る）のために「新天地を求めて」南米にわたりチリに出で、チリの開拓戰爭にオー・イツギンズ O'Higgins などとも轉戰し、更に彼と共に自ら云ふところの「獨立の最も光榮ある戰」(las más gloriosas campañas de la Independencia) を戰ひ、當時軍將の第一人者であつたといふことである。ベンハミンはその孫として一八三一年に生れたのであるから、人となる時期は例の獨立戰役も大方は片付き「祖父の血をうけた熱情の彼」も軍陣を馳驅する必要はなかつたが、革命の後をうけた社會の不公平階級の對立は劍の代に筆を持つて立たずにはゐられなかつたさうである。祖父の獨立 Independencia と自由 libertad に對して彼は平等 Igualidad を唱へ、事實その盟友アルコス Santiago Arcos などは熱心なマルクシストでその派のものも研究しまた影響もうけたらしい。それが彼自身とチリの國家に對し、究極においてどういふ結果を結ばしめたかは、チリの現代を知らない私には分らないが、彼の傳記には何も書いてないやうである。しかしながら兎も角農民のためには大いに働いたことはその著作目錄を見れば一斑は窺はれる。そして議會にも出で更に文教を支配するなど政治上の最も重要な位置にあつて、自らのモットー「生活は勞働である」(La vida es una faena) の通りに口に筆に「鬪爭的豫言者的」な生活を送つてゐたが、その大學と殊に關係があつたといふのは、この偉大なる市民がその一學部の翰林員 miembre académico であり、有力な顧問であるのみならず、その著作の幾つか、殊にその初期の歴史的方面の著作が大學の紀要によつて發表されてゐた事があり、その研究そのものにも大學との關係において行はれたといふのである。

そのため、盛大な百年祭の行はれた翌日、即ち一九三一年八

月二十六日には夕六時半から大學ではその記念講演會を催し、二三の學界有力者の講演が行はれたのであるが、その中、大學を代表してベンハミンを述べたマリアノ・ラトルレ Mariano Latorre の演説の中には次のやうな言葉がある。——「私は曾て彼を何ら附加的な言辭をつける事なく、單純にたゞ作家として呼んだ、何となれば、ビクニヤ・マケンナは私の考によれば、煩はしい審美的な冗舌もなければ、謎のやうな想驗論も振りまはさない純粹の文人を代表してゐたからであるからである。」（彼は單なる市民でもまた所謂歴史家でもなかつた）、——「彼の中には豫言者があり、戰士がある、それはゾラやレオン・トルストイの精神的殿堂を思はしめるのである。」「從つてベンハミンの書く歴史は宛も一幅の畫であり、その畫は更に劇となり、劇は人間の型をつくる。（そして彼自身が歴史上この類型人 hombres-tipe の一人であつた）彼自身の言をかりるならば、描かんとする人を靜かにその墓場より立たしめて虚心を以て之に對し此をそのあらゆる相の下に觀察し、その時代のすべての陰翳と周圍と共に彼の存在を再現して活人畫を描くのである。」「これがベンハミンの歴史に對する考へであり、これが彼の歴史の頁の中に人性の血（sangre de humanidad）を廻流せしめてゐる所以」であると共に「また歴史家としてよりも更により多く文人であつた所以でもあつた。」「兎に角彼はその對象を愛しその愛に溺れ込み（enamorar）得る人であつた。歴史を愛し、自然を愛し、人を愛し、社會を愛し、自由と國を愛する」——彼が歴史家であり、文人であり、社會改革家であり、政治家であり、愛國家であり、一口に云つて大いなる經世家であつたのはかうしたところから來てゐるのであらう。眞の歴史家としての意味と價値はまた別である。

私はベンハミン・ビクニヤ・マケンナの眞の具體的の價値がどの程度にまであり、また彼が現代において如何に生きてゐるかは知らない。彼の傳記によつても私にはよく分るやうには思はれない。奉讃的な傳記は由來杜撰なものである。一九三一年八月二十五日、彼はサンチアゴにおいて國民的英雄としてその出生百年祭を祝はれた。しかし國民的英雄なるものはその時のその國民でなければそれを奉讃する眞の心持はわからないものである。

最後に右の二册の紀要の目次は

第一卷——ルイズ・ガルダメス Luis galdames ビクニヤ・マケンナの青年時代——ギリエルモ・フェリウ・クルス Guillermo Feliú Cruz ビクニヤ・マケンナの什作——カルロス・ビクニヤ・マケンナ Carlos Vicuña Mackenna ビクニヤ・マケンナの議會演説目次——グスタボ・ラバトゥト Gustavo Labatut ビクニヤ・マケンナとサルミエント（Domingo Faustino Sarmiento はアルヘンチナの有力な社會教育家政治家である。）

第二卷——エウヘニオ・オルレゴ・ビクニヤ Eugenio Orrego Vicuña ビクニヤ・マケンナ、その生涯とその業績——チリ大學とビクニヤ・マケンナの百年祭——一九世紀の批判裡における

ビクニヤ・マケンナ――一九三一年の知識人の批判裡におけるビクニヤ・マケンナ――書目〕（泉井久之助）

●上代日本の社會及び思想　津田左右吉著

この書は「書紀の書きかた及び訓みかた」、「神とミコト」、「大化改新の研究」及び「上代日本人の道德生活」と題する、夫々獨立の四編の論文から成つてゐる。中初めの三編は嘗て一度史學雜誌若しくは史苑の誌上に發表せられたことのあるもの故、ここには主として最後の一編に就いてその論旨のあるところを紹介しよう。

この一編はまた「道德意識の發達」及び「道德生活の狀態」と題する二章に分れ、前章に於ては上代文獻の上に種々まじり合つて認められる道德意識上の事實をその發達の段階に從つて辨別し、それら相互の關係をあとづけることを意圖し後章は更にかやうな意識の根柢と考へられる道德生活そのものゝ狀態を家族形態、社會及び政治組織等の諸側面から明らかにしようとしたもので、兩章を通じて、上代の道德が概して自然に養はれた社會的習慣として行はれたもの、又は何人にも共通な從つてまた社會的に承認せられた人情の發露であり、個人についていふとそれが嚴肅なる道德的義務として意識せられたのではないこと、然もその間に自ら呪術的宗教的意識から漸次人間の力と責務とが自覺せられ來る經路の認め得られることを、結論してゐる。著者がかやうな考察をなすに當つて執つたところの態度乃至方法は一にその舊著記紀の研究以來の諸研究と同じく專ら文獻上の記載をそれの內的批判によつて限定しその範圍に於て最少限度の眞實さを確保せんとするもの、その根本に於て議すべきものは殘されてゐるとしても、終始一貫一つの立場を忠實に守つてその執るところの論理を究極の點まで押進めて行くところに著者の學問的の面目があり、學界の風潮に顧慮せず、相續いてその信ずるまゝを公にするところ自ら一つのプロテストの意味をさへ汲みえられるであらう。併しながら飜つて考へればこの著が結論としてもつところ、殆ど前揭記紀の研究以來の三著――いな更に遡つて文學に現はれたる我が國民思想の研究に見るところと殆ど同じくその間特に稱すべき學問的な發展の認め難い點に、著者の學問が既にある極限に立ち、その方法として自ら他の立場を取入れて來なければならぬところまで立到つてゐることを暗示するものがあるのではなからうか。具體的にいへば著者に於て特に卓越して認められる矛盾律に立つ辨別的（diskursiv）論理（その鋭さには洵に敬服すべきものがあるが）のみを以てしては、著者自身の立つ文獻的立場に於てさへもその解釋の妥當を期しえられないのではなからうか、短文意を盡さぬところは他日の詳論に期し度いと思ふ。（菊判　本文六〇六頁、東京岩波書店發行、定價四圓）

●聖德太子御製　法華義疏の研究――東洋文庫論叢第十八――　花山信勝著